

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520384
 研究課題名（和文）動詞連結に関するヒンディー語、マラーティー語、ネワール語と日本語との対照研究
 研究課題名（英文） A Contrastive Study of Verb Concatenations in Hindi, Marathi, Newar and Japanese
 研究代表者
 西岡 美樹（NISHIOKA MIKI）
 大阪大学・世界言語研究センター・講師
 研究者番号：30452478

研究成果の概要（和文）：

本研究では、アジア諸語のうちヒンディー語、マラーティー語、ネワール語と日本語における、動詞連結（V1+V2）について対照研究を行った。主な成果としては、形態のアスペクトとは別に、4つの言語では語彙的なアスペクトをV2によって表わすこと、また、その語彙的なアスペクトは起動、継続、終動のような動作態（Aktionsart）に属することである。さらに、日本語同様、V2に方向を表わす動詞を使用するが、必ずしも同じ動作態になるわけではないことも同時に明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed to elucidate differences and similarities of verb concatenations (V1 + V2) in Hindi, Marathi, Newar, which are spoken in South Asia, and Japanese. The following are the main findings of the study so far: (1) apart from grammatical aspects which some V1s indicate, V2s add some lexical aspects to V1 optionally, (2) the lexical aspects expressed by V2s correspond to Aktionsarts, e.g. inchoative, durative and terminative, and (3) the directional or vector verbs used as a V2 do not necessarily express the same Aktionsart in the four languages. Such differences need to be studied further.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：動詞連結、ヒンディー語、マラーティー語、ネワール語、日本語、複合動詞、対照研究、Aktionsart

1. 研究開始当初の背景

アジア諸語の類型論的特徴の一つとして、動詞連結（V1+V2）から構成されるいわゆる複合動詞（compound verb/complex predicate/serial verb/light verb construction：以下CVと呼ぶ）がある。南ア

ジア諸語では、たとえば、Hook (1974)の *The Compound Verb in Hindi*, Masica (1976, 1991)の *Defining a linguistic area--South Asia*や *The Indo-Aryan Languages*のように、系統が異なる言語で共有されている言語現象としてこの複合動詞が盛んに研究されて

いた。一方、日本語でも複合動詞に関する研究は進んでいた[影山(1993)の『文法と語形成』, Matsumoto(1996)の *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'* 等]。しかし、これらの対照研究、特に形態・統語を土台にした日本語との対照研究はほとんどなされておらず、言語の普遍性に寄与するには至っていなかった。

また、そのため、昨今増えている南アジア(特にインド)での日本語学習者に適した日本語学習教材、その逆の、日本における該当諸言語の学習者に適した教材開発に着手できない状況であった。

本研究は、そのような状況下で、それまで個別言語研究および日本語との対照研究を行ってきた研究代表者西岡(ヒンディー語および日本語担当)、研究分担者パルデシ(マラーティー語および日本語担当)、桐生(ネワール語および日本語担当)でチームを組み、これまで培ってきた言語学の知見を活かし、語学の枠を超えた通言語的な文法的枠組みを確立すべく、これらの言語の動詞連結が表わす実体解明を行うこととした。

2. 研究の目的

インドを中心とした南アジア諸国で多くの母語話者をもつ、インド・アーリヤ語派のヒンディー語、ヒンディー語の親族語であるマラーティー語、さらに近隣に位置し言語接触を受けてきた、チベット・ビルマ語派のネワール語に観察される、いわゆる複合動詞(compound verbs)、すなわち第一動詞と第二動詞(V1+V2)の動詞連結について、同じく第一動詞(連用形やテ形)と第二動詞から成る表現形式をもつ日本語と対照し、この4言語で共通して見られる普遍性と個別性を記述し、言語の普遍性の解明に寄与することを主眼とした。

また、それらを解明することで、昨今増えつつある南アジア諸国での日本語学習者および日本における南アジア諸語学習者の語学教育、特に教材開発に有用な枠組みを整えることも併せて目指した。

3. 研究の方法

大まかな流れとして、まずヒンディー語、マラーティー語、ネワール語、日本語の対照構造のすり合わせを行い、その後それぞれの言語で使用される第二動詞(V2)のアウトプットとしての機能を分類、また、それらを包括する通言語的な範疇の検討を行った。

具体的な手順は、以下の通りである。

(1) 各言語での動詞連結に関する言語資料

収集

- (2) 各言語でのV1+V2の連結形式の組み合わせを網羅的に列挙
- (3) 各言語での主たるV2を列挙
- (4) 各言語でのV2の表わす意味の確認(文法化されているか否かも含む)
- (5) それらV2の各言語学での扱いを踏まえ、文法範疇もしくは意味範疇の異同の確認
- (6) 各言語で差異が生じる場合、認知言語学的な視点も交えた包括的な範疇の模索

前半部(1)(2)(3)は本研究の準備段階である。各言語の担当者が各自国内外での言語資料収集およびインフォーマントへの調査を行い、V1およびV2の連結の型を詳細に記述した。

後半部(4)(5)(6)については、研究打合せの際に、収集した言語資料を基に各言語でV2が表わす実際の意味と、既存の文法範疇であるアスペクトやモダリティ等について、各言語学での扱いを踏まえ、議論を行った。その後も、研究打合せの折に各言語でそれぞれの異同を確認し、差異が生じるものについては、それを包括できる範疇を模索した。なお、メールでの情報交換や議論は、研究期間中、必要に応じ随時行ってきた。

4. 研究成果

本研究の研究成果は以下の通りである。

(1) 前半部

各言語でのV1+V2の連結形式が総覧できたことにより、具体的なV1の形式が明らかになった。詳細は以下の通りである。

① ヒンディー語

ヒンディー語のV1は、裸の語幹(bare stem)、未完了分詞(V1-*taa/te/tii*)、完了分詞(V1-(*y*)*aa/(y)e/(y)ii*)、および不定詞(V1-*ne*のみ)の4つ。

② マラーティー語

マラーティー語のV1は、10前後。うち、代表的なものはV1-*un*、V1-*aaylaa*。

③ ネワール語

ネワール語のV1は5つ。代表的なものはV1-*aah*、V1-*aa*。

④ 日本語

日本語のV1は、連用形(V1-*i/e*)とテ形(V1-*te/de*)の2つ。

本研究の対象言語4つの代表的なV1は以

上だが、このうち、ヒンディー語のいわゆる CV (裸の語幹+V2) に相当する V2 を伴うものとしては、マラーティー語は V1-un 形、ネパール語は V1-aa の形である。ともに伝統文法的には、‘Conjunctive Participle’ とされる。日本語は、テ形接続の「しまう」、「おく」、「いく／くる」、「みる／みせる」、「やる／あげる／もらう」や、数ある連用形接続のものうち「あがる／あげる」や「まくる」等がこの範疇の対象になることが明らかになった。

(2) 後半部

本研究の最大の焦点となったのは、動詞連結という構造体としての一体化(文法化)において、V2 が見せる意味拡張を記述すること、および、語学ごとに範疇の差異があるもの、その差異が起因し、既存の範疇に収まらないものを包括する新たな範疇を模索することの2点であった。

上記4言語の対照の結果、意味機能の点で類似したV2の使用があるにもかかわらず、日本語学の「アスペクト」の指し示す範疇がしばしば様でないこと、またその元となる‘aspect’には‘grammatical aspect’と‘lexical aspect’の区別があり、後者の覆う範囲に大きな幅があること、さらに日本語学で盛んに使われる「モダリティ」と‘lexical aspect’はかなり類似した側面があることが明らかになった。

本研究では、この種の「アスペクト」を特に動作態(Aktionsart)と位置付け、使用されるV2の細かな意味的特徴を観察した。該当言語で共通の動作態として想定されるものは、先行研究にも見られる、起動、継続、終動が主だが、この他にも、日本語の授受動詞のような、方向を表す(directional/vectorial)動詞による、方向性(特に対話で発生するもの)という動作態を設定することができることを主張した。

なお、これまで本研究の成果公開は、海外でのWorkshopや学会発表で、研究代表者、分担者が共同または各自で行ってきた。

(3) 国内外における位置づけとインパクトおよび今後の展望

本研究の国内外での位置け、インパクトおよび今後の展望については、以下の主な3点が挙げられる。

- ① Colin. P. Masica をはじめ南アジア諸言語関連の言語学者に向け、日本語のV1としてテ形以外に連用形という別の形があることと、それがV2として元の意味を漠然化させた動詞を接続し、南アジア諸言語で観察されるいわゆる複合動詞(CV)

と類似した機能をすることを主張した。なお、これはMasica(1976)で、テ形に接続するもののみを、ヒンディー語のCV、つまり、意味が漠然化したV2と照らし合わせており、連用形に接続するものについては、ほとんど言及が成されていなかったことを踏まえてのものであった。

- ② 文法範疇である‘aspect’(相、アスペクト)と‘Aktionsart’(動作態)について、‘lexical aspect’を包括的に表すカテゴリとして‘Aktionsart’(動作態)を導入したが、各語学で扱った既存の‘aspect’や「アスペクト」の概念との衝突、さらには「モダリティ」の範疇が折り重なり、普遍文法的な枠組みを整えるにあたって、今後国内外でそれぞれの立場から異論が出るものと予想される。

- ③ 日本語の「いく」「くる」および「やる」「もらう」のような授受動詞のように、方向を表す動詞がV2として使用される点は、ヒンディー語、マラーティー語、ネパール語でも共通であった。ただし、それらの動詞がそれぞれの言語の中でどのような動作態として働き、どのような細かなニュアンスを醸し出すかは、一様ではない。これを明らかにするには、動作態の下位範疇に出てくる細かなニュアンス(例えば、「方向性」が起因して発生する利益(benefit)や迷惑(distress)等を詳細に調査、分析する必要がある。特に日本語の授受動詞、およびそれに対応する各言語の動詞のV2使用については、細かなニュアンスを探ることになるので、日本語をよく解する該当母語話者および該当言語をよく解する日本語母語話者のインフォーマントを要する精緻な研究が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. Hook, P. E. and Pardeshi, Prashant. “Are Vector Verbs Eternal?”, *Indian Linguistics*, ページ数未定, 2011年出版予定。(査読有)
2. 松瀬郁子, 桐生和幸. 「ネパール語における自動詞と他動詞の対応」, 西光義弘, プラシャント・パルデシ (編)『自動詞と他動詞の対照』. pp. 33-68, くろしお出版, 2010. (査読有)

3. Hook, P. E. and Pardeshi, Prashant.
“A Taxonomy of EAT-Expressions in
Marathi”, *Annual Review of South Asian
Languages and Linguistics*, pp.41-63,
2009. (査読有)

[学会発表] (計 9 件)

1. Nishioka, Miki. “Aktionsarts in the
Verb Concatenations (V1 + V2) in Hindi
as compared with the Japanese ones”, in
South Asian Languages Analysis
Roundtable 29th, Central Institute of
Indian Languages, Mysore, India, Jan.
7th, 2011.
2. Hook, P. E. and Pardeshi, Prashant.
“Are Vector Verbs Eternal?”, in the
32nd All-India Conference of Linguists
(Linguistic Society of India),
University of Lucknow, Lucknow, India,
Dec. 22nd, 2010.
3. Nishioka, Miki. “The Correspondences
of the Compound Verb Construction
(V₁+V₂) in Hindi with the one in
Japanese”, in South Asian Languages
Analysis Roundtable 28th, University of
North Texas, Denton, TX, USA, Oct. 10th,
2009.
4. Kiryu, Kazuyuki. “Tense and aspect in
Kathmandu Newar”, in 15th Himalayan
Languages Symposium, University of
Oregon, Eugene, OR, USA, Jul. 31st, 2009.
5. Nishioka, Miki. “Genre Effects of
Compound Verbs in Hindi”, in
Workshop on Compound Verbs in the
Indo-Turanian Linguistic Area, La
Trobe University, Melbourne, AU, Dec.
19th, 2008.
6. Pardeshi, Prashant. “Compound Verbs
involving “PUT/KEEP” as a vector
verb in Northeast, Central, and
South Asian languages: An
areal-typological study”, in
Workshop on Compound Verbs in the
Indo-Turanian Linguistic Area, La
Trobe University, Melbourne, AU, Dec.
19th, 2008.
7. Kiryu, Kazuyuki. “Some Compound
Verbs in Newar”, in Workshop on
Compound Verbs in the Indo-Turanian
Linguistic Area, La Trobe University,

Melbourne, AU, Dec. 19th, 2008.

8. Pardeshi, Prashant, Hook, P. E. and
Chung, Sung-Yeo. “The compound
verb in the constitutions of India,
Japan and Korea”, in Workshop on
Compound Verbs in the Indo-Turanian
Linguistic Area, La Trobe
University Melbourne, AU, Dec. 19th,
2008.

9. Hook, P. E. and Pardeshi, Prashant.
“Are vector verbs immune to
evolution”, in Workshop on
Compound Verbs in the Indo-Turanian
Linguistic Area, La Trobe
University Melbourne, AU, Dec. 19th,
2008.

[その他]

ホームページ等

<http://www.world-lang.osaka-u.ac.jp/user/dumas/research.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西岡 美樹 (NISHIOKA MIKI)

大阪大学・世界言語研究センター・講師

研究者番号：30452478

(2) 研究分担者

パルデシ プラシャント (PARDESHI PRASHANT)

国立国語研究所・言語対照研究系・准教授

研究者番号：00374984

桐生 和幸 (KIRYU KAZUYUKI)

美作大学・生活科学部・教授

研究者番号：30310824

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

フック ピーター イー (HOOK PETER E.)

Professor emeritus of University of
Michigan and visiting researcher of
University of Virginia

柴谷 方良 (SHIBATANI MASAYOSHI)

神戸大学名誉教授、Deedee McMurtry
Professor of Rice University

近藤 達夫 (KONDO TATSUO)
大阪大学名誉教授